鷹鳥を鳥柴ニ付る事

一 定家卿ハ鷹三百首ニ

　萬てもくとしはの雉を付る玉の
　もゝゑやさくらの枝にはけまし

鳥柴ニ付るハ雉とも又木ハ梅櫻ニ付るなとの数あり

一 二条基房卿鷹詠連歌云

　見かりする鷹雉の文かへすこのま
　春ちくるあとは鳥柴そつけける

鳥柴の事 大方百首ニ有 但神代より本ハ両様
神秘ニて是を秘する人ハ大概五ニ人ありかけける以下

子細あて　史文云仁徳の朝より鷹はじまれるも
神代よりといへるハ心得かたく在哉

一　註しく字ニ岡本の関白殿さかりなる紅梅の枝に
鳥一双をそへてこの枝に付てまいらすべきよし御鷹
飼下毛野武勝に仰られけるに花に鳥付るすべ
知り候はず一枝に二つ付る事も存知候はずと
申けれハ膳部に尋られ人々に問せ給ひて又武勝
にさらバ己が思はんやうに付てまいらせよと仰られ
たりけれハ花もなき枝に一つ付てまいらせけり

定文梅花の枝に鳥付る事ハ梅がえに鷹も鳥もさしいらひて花を
ちらさぬ(けま)ハ花ある枝にハ付ぬなるべし　梅もよなしちらぬなるべし　二つ付
る事ハ数多けきハ抑て定説
うちさき花なるべき事や

武勝か申侍しハ柴の枝梅の
枝つぼみたると散たるとに付く　五葉などにも付く
枝の長さ七尺或ハ六尺返し刀五分に切る枝のなかに
鳥を付く付る枝ふまする枝あり藤のさきハひうち
羽の長にくらべてきりて牛の角のやうにたわむべし初雪
のあした枝を肩にかけて中門よりふるまひて参る大みぎり
の石をつたひて雪に跡をつけずあまおほひの毛
とらかる事ハ鷹はよわごしをとる事なれバ御鷹のとり
たるよしなるべしと申き花に鳥付すとハいかなる故に
ありけん　案文三花の考前に出る　長月ばかりに梅の作り枝に
雉を付て君がためにと折花ハ時しもわかぬと

伊勢物語にみえたるなり花ハよろしからぬにや（定家云 伊勢物語）
詮の梅の作り枝に結付るハみしもさりぬとてらん料に志てゐる
一本のたくいも事にそあるハ鶯と花の枝に付たる説ありハ見らかきにや

一伊勢物語云むかしおほきおほいまうちきみときこえしおはし
けりつかうまつりけるおとこ長月はかりに梅の作り枝に
きしをつけてたてまつるとて

我たのむ君かためにとおる花ハ
ときしもいつ[illegible]ものにそ有ける

とよみてたてまつりけれハいとかしこくおかしかりたまひてつかひに
禄給へりけり

此梅の作り枝ハたゝ定る事なり鷹の鳥をつくり
枝に付る事ハ定し是ハ説に依てかはし

一はしゝく光寿命院抄云（野槿亦用之）付る枝事此木七尺五
寸若ハ八寸の梅の木よりふせむくなしてうちおもてに
毛おしハ多う是を多く付る此木を云一説に云たかん此木を
いふ其なり事の内ハ立枝を通りて雄雉を左にかけ
て付く雌をさけて付く年明てハ雌を左にかけて付く
まるみハ雌を賞翫する也又なり付るに傳有或ハ此
を用ゆとも云へとも春ハ梅秋ハ紅葉に付る事常の
義なり大臣の大饗の時是を用る又秘事の雉を
人にまいらする作法なり又鷹狩より人のかたへ

はいたかミハ三四尺の柴の枝にかゝめと付候て本とおさし
らかして付る也一双を付る事ハ近比知る人なし参の
武則か説又四条大納言隆親卿の説柴のこみ六七尺
壁(?)鷹一双を付る也又大臣の大饗之後穆(?)説の時の鷹
用也(?)鷹飼ハはいたかミの様(?)の小松に付也雉
知(?)の説鷹飼よりま人のもとへ雉を送るにハ柴也
然とも萩薄をはしめて何にても付る也一説ニ鳩を
付る事あり山鳩也或説鷹飼以後不付之説とハ
萩薄の枝に付小鳥をハ紅葉の枝に付る也り雀とハ
竹の枝に付る也十月ニハふし柴に付るしハ御鷹

羽武久か説也　英河海抄ニ見え也(?)

一 洞風抄云鷹の取たる鳥をハ何として持候らんと答(?)
を蘇(?)て頸にかけて羽かいの下より小肩のらへより鉾(?)て三
ふせ直てかけむすひ(?)にして一ふせ直て切てさしてて其(?)
ハ枝の枝秋ハ紅葉冬ハ松にかけて帰る也そのの鳥枝
ハ何にもあり　英(?)云頸と羽の下に通るに　ハかも(?)へし[illegible]也(?)
一 鷹飼(?)書云鳥を本に付る事春ハ梅枝冬ハ松
柳楓一の枝より切口上二三尺あり枝を男鳥二付る也ハ其(?)ハ
女鳥をハ末鳥に付て女鳥ハうりも末鳥も本
さらなり二つ付るにハ何にても西方に向て付て一付る小

は胸せの方をそとに折して置くとは胸をそとに折して下好る
とは胸毛を末に添へて上とは山鳥を羽とかしらとの間へ枝の
切口をさし入山鳥の足に結びとめて一方とは羽の下へ通し
一方をはかしらの方へまはし末に結付也 いづれにてもよし
て下より上の方へ絡ひに折り下とは足二ッに紙（コウ）より一ッ
付て枝に添ゆる也 又胸に結ふ也 足の結目の方に彼紙
よりを懸て手には三のまゝにまる枝の下へまはして足のおもて
にてかくろきにもしめるべし ただ右にも左かたの方足の間
に通して又くゝりてのちにても足を枝に巻付て本末にまと
巻とめて末の方へ巻返して三ッ四ッ下して綱（ツナノコト）ざまにあらかすて
三ところに切て 後は鳥の毛のやうにみてたすかうを結もとして
の山鳥にまるも枝折くはもろもとさしても結は
柴といふ也 竹にて枝を付る事折り共

貞丈云 鳥柴と云本あり 又 梅 桜 楓 松 何れにても鳥を
付る時の枝はいづれも鳥柴といふなるべし

安永七年戊戌閏七月九日 伊勢平藏貞丈識

鷹の鳥柴にことよ付る事

いまハこと多く梅の枝に付るさる事
付るなり

枝長サ鷹匠口伝の由にハ大緒五尺ト有
つまり武携説にハ七尺或ハ六七尺ト云
五六七尺の間と心得へし

梅桜なとよりも
あなしものけるる
節をもちいして
上の方ハのこして付く

まハこそ女
又ハ男をと
此図ハまの

茅ま武術ヶ牛の角の振まいしハ世話とハ申らでなく
此小枝ハひと羽とらうる山鳥の足へさし
小枝と早くて小き打ちて見え申すよ

男鳥女鳥向合て付く
鳥とも女鳥と出てたる鳥るまも女鳥と作くと
云うも男鳥と上の者うまれ
鳥の付ゆるあり

かとして男むまひぬして牛の角の振たひちて
あ は山鳥小枝なけハ別ニ の
あつらるとなりとんどりハ（筆こ）

前ま引る本書よ
引くし
貞丈図